

《研究ノート》

モンゴル語方言分類の問題

——特に『言語学大辞典』の「内蒙古語」
という項目をめぐる——

フフバートル

1 問題の所在

モンゴル語の研究は、前世紀を通じて、文語のみを対象とした、一種の文献学(philology)にとどまっていた。しかし今世紀に入るとG.J.ラムステットをはじめ、A.D.ルードネフ、B.Ya.ウラデーミルツォフが、各地で実際に話されている生きたモンゴル語、すなわち諸方言の研究に着手し、方言分類を試みてきた。しかしその後、さらに各方言の記述的研究がすすむにつれて、当時の分類はそのままでは実情に合わなくなっていた。そこでウラデーミルツォフの分類に代って、より詳細なサンジューエフとポツペの所説が現われた。この二人のうち、サンジューエフの著作は中国語とモンゴル語に翻訳され、出版されたために、中国においても、モンゴル人民共和国においてより影響力を持つに至った。次いで現われたロブサンワンダンの論文は、

モンゴル諸語、方言分類の原理を直接の対象としていた。

この論文でロブサンワンダンは、一九五五～五六年に中国で行われた中国領内のモンゴル諸語、方言に関する膨大な調査資料にもとづいて、チンゲルタイが行った分類を参考にしつつ、モンゴル語地帯全域にわたる現代モンゴル諸語、とりわけモンゴル語諸方言の分類について新しい見解を示した。ロブサンワンダンのこの分類法は日本の研究者によっても、「最も新しく、かつ本国の学者の分類」とあると評価されており、また本国のモンゴルでは一九八四年に出版された、包括的な方言研究書もその説をほぼそのまま採用している。そして、それが内モンゴルのモンゴル語学者たちに与えた影響も少なくないようである。しかし、本稿はこの説に更に「妥当性」を確認するために書かれたのではなく、ロブサンワンダンのこの所説が、新たに生じた方言分類の問題に重要な視点を与えていることに注意を喚起するためである。すなわち、ロブサンワンダンはこの論文において、モンゴル語、方言の分類は、かつての部族やそれを基礎とする行政区分に影響されるべきではなく、話し手相互間の歴史的交流によってもたらされた相互の理解度などの、言語内の事実にもとづくべきだという、モンゴル語、方言分類の基本原則を強調したのである。これは主にサンジューエフが、オイラト方言とブリヤート方言をモンゴル語、モゴール語などと同様に「言語」として分類

したことに對する批判であつたが、ポツペの分類もサンジエーエフのそれとほとんど変らないものであつたため、批判はポツペの分類にも及んだ。しかし、ポツペの場合は、言語そのものに即して、言語体系——主として音韻体系の中から特定の現象を取り出して分類基準にしたものである。言語内的な分類基準の機械的な適用の結果は、しかし、これら諸方言を母語とする研究者の感覚からすれば必ずしも機械的でも客観的でもない場合がある。

何が言語 (language) であり、何が方言 (dialect) であるか、こうした決定が、言語外の影響を受けずに行われるのは至難のことである。しかし、モンゴル語方言分類に於ては、近代国家の政治的境界に影響されないという、従来の好ましい伝統からみて、ロブサンワンダンのこの主張は正当であると言える。というのは、モンゴル語の場合は、例えば、ドイツ語とオランダ語との關係のように、国家的所屬によつて「言語」か「方言」かが決定されるというようなことはなかったからである。

一方、問題視されたサンジエーエフの分類でも、実はオイラト方言とブリヤート方言をはっきりと「独立の言語」だとは言っていない。それどころか、彼はオイラト方言も、ブリヤート方言もそれぞれ独立の言語になるにはいたっていないと強調すると共に、ダグル語、モンゴル語、モゴール語とその他の諸語(オイラト、ブリヤート、モンゴル)

との違いを三点挙げている。それを次のようにまとめることができる。

1) これらの言語(ダグル、モンゴル、モゴール)が十三・十四世紀に他のモンゴル諸部族から孤立したあと、モンゴル語の構造に重大な変化が生じた。

2) これらの言語はモンゴル文字で書かれたことがなく、したがってモンゴル文語との交流がなかった。

3) これらの言語はそれぞれまったく異なる大言語の中に包囲され、したがってモンゴル語との交流がなかった。

オイラト、ブリヤート、モンゴルの場合については、おおよそ、以上示された三点を全く逆転させた状況が挙げられている。

それにもかかわらず、サンジエーエフはなぜ「オイラト語」とか「ブリヤート語」とかというふうと呼ぶのかと、ロブサンワンダンは、サンジエーエフが掲げたのとはほぼ同じ状況を三点挙げて反問している。その背景を彼は、モンゴル帝国が滅亡した後も数百年にわたつて、オイラト、ブリヤート、内、外モンゴルのモンゴル人たちが密接な關係を持ちつづけたことや、移住民との雑居によつて方言間の深い分裂が阻止されたことを理由にあげて説明している。

しかし、本稿の目的は「オイラト語」や「ブリヤート語」をいかにみるべきかを論ずるものではなく、モンゴル語方言分類ではまだ問題になったことのなかった新たに生じた

問題を考えることにある。

先に見てきたのは一九五〇年代の議論である。ところが、モンゴル研究が飛躍的に深まった数十年後の今日、日本の言語研究の集大成とも言える『言語学大辞典』には驚くべき分類法による異様な言語名が登場してきた。すなわち「オイラト語」や「ブリヤート語」ならば比較的なじんでいるが、「オルドス語」とりわけ「内蒙古語」という「独立の言語」は、この『大辞典』がはじめて創造した新言語であらう。いずれにせよ、この作りものの新言語は、社会言語学的な観点から生じる様々な問題を別にするとしても、言語学的な分類基準そのものに決定的に反しており、認められないものである。

2 「内蒙古語」は「独立の言語」か？

ここでは問題の核心、「内蒙古語」について論ずるはずであるが、そのためには「オイラト語」について前もってふれておくことが好都合なので、まず「オイラト語」から見ていくことにする。

「オイラト語」⁽⁹⁾

「オイラト語」とはどのような性質のものか、順序としてまず、上記『大辞典』における栗林氏の記述を見ることにする。

モンゴル諸語のオイラト系の言語、方言の総称。ソ連

邦カルムイク自治共和国のカルムイク語、モンゴル人民共和国西部のオイラト系諸方言、および、中国新疆ウイグル自治区、青海省、甘肅省等の衛拉特方言を含む。狭義には、新疆ウイグル自治区のオイラト方言、および、彼らの用いる「オイラト文語」(後述)をさすことがある。

これにしたがえば、栗林氏が記述したもう一つの独立の項目である「カルムイク語」⁽¹⁰⁾は、「オイラト語」の「カルムイク語」、そして、新疆ウイグル自治区のオイラト方言は「オイラト語」の「オイラト方言」であることになり、また逆にこの「オイラト方言」も「狭義には」「オイラト語」となる。こうした矛盾があるとしても、「オイラト語」の分類がそれだけの問題に止まるならば、私はそれも一つの分類方式と見なし、ここに取りあげるほど問題視はしなかったであらう。しかし、「オイラト語」は「さらに」次のように分類されている。

さらに、オイラト系の言語、諸方言は、モンゴル人民共和国のハルハ方言や中国内蒙古自治区の内モンゴル諸方言と言語的な隔たりが少なく、それぞれの言語による相互理解も困難でないことから、モンゴル人民共和国のオイラト系諸方言はハルハ・モンゴル語の方言として、また、中国内のそれは内モンゴル語の一方言とみなされている。

「みなされている」などと、学界の合意を得たかのように客観化して述べているが、そう「みなして」いるのはおそらく栗林氏だけであろう。そう「みなされる」ためには、まずその前提となる「内蒙古語」なるものを認めなければならないはずである。

では、栗林氏が「独立の言語」と見なす「内蒙古語」とはいったい何であろうか。以下栗林氏の論述を見よう。

「内蒙古語」

内蒙古自治区^{ないもんこう}を中心^{なごう}に分布する中国内のモンゴル(蒙古)族の言語。話しことばは、チャハル(chahar)、察哈爾^{chahar}方言の発音をもって口語標準音とし、書きことばは、伝統的な縦書きの蒙古字で表記する現代の蒙古文語を用いる。(中略——引用者)言語的にみても、たとえば、モンゴル人民共和国の標準語の基礎方言となつてゐるハルハ(harha)方言と、内蒙古自治区のチャハル方言の差異はわずかであり、相互理解にはほとんど支障はなく、両者は同一言語の方言の關係にあるとみなしうる。

しかし、モンゴル人民共和国と内蒙古自治区で、互いに文字体系のまったく異なる書きことばを有し、それぞれが独自の口語標準語を育成している今日、両者を独立の言語とみなすことも可能であり、その立場からすれば、呼称の上でも区別する必要がある。

栗林氏の論述の中で私が傍点を付した部分は、モンゴル

諸語の分類においても最も注目すべき、しかもかつて例のない新しい見解である。

栗林氏が、「内蒙古語」を「独立の言語」とみなす根拠として、「ハルハ・モンゴル語」と「内蒙古語」における言語内的事実よりも、むしろ「文字体系のまったく異なる書きことば」であることと、「独自の口語標準語を育成している」ことをあげている。すなわち、内モンゴルの諸方言を独立の言語としているのは、その文字だということになる。書きことばとしては綴りこそ異なるけれどもことば自体は変るものではない。それは、モンゴル人民共和国でキリル文字により出版された数多くの書物が内モンゴルでまったくそのまま伝統的なモンゴル文字表記に移しかえられて、まったく違和感のない文章として愛読されていることから明らかである。

同じ言語を話しながら異なる文字を使用している民族はモンゴル民族以外にもいくつもの例がある。たとえば、「内蒙古語」と基本的に同じような状況にある中国領内のカザフ語と朝鮮語を挙げることができる。カザフ共和国のカザフ語はキリル文字で表記されているのに対し、中国領内のカザフ語はアラビア文字を使っている。そして、韓国ではハングルと漢字を同時に用いているのに対し、中国の朝鮮族は朝鮮語の表記には漢字を一切使用しない。しかし、これを文字体系が異なるという理由で、伊犁カザフ自治州

のカザフ語はその自治州の名称をとって「伊犁語」とし、同じく延辺朝鮮族自治州の朝鮮語は「延辺語」という呼称を与えた上で、それぞれを「独立の言語」にしたてあげることを、どんな言語学者が思いつくだろうか。事実、『言語学大辞典』に執筆したチュルク語学者や朝鮮語学者はそんなことはしていない。したがって「伊犁語」「延辺語」などの独立の項目を立てたりはしていないのである。ところが、モンゴル語の場合は、「内蒙古自治区の名称をとって」「内蒙古語」という「独立の言語」を項目に設けたのである。しかし、今や、モンゴル人民共和国ではキリル文字が廃止され、一九九四年から内モンゴルと同様の伝統的なモンゴル文字を用いることが公式に決定された。したがって、一九九四年以降、「内蒙古語」は、栗林氏の掲げた存立の基盤を失い、『言語学大辞典』における「内蒙古語」という項目も少なくとも理論的には消えざるを得なくなるであろう。同様に、未刊の「モンゴル語」という項目にも同じような問題が生ずるだろう。更に波紋は「オイラト語」の内容にも、そして、「オルドス語」など他の項目にも及ぶであろう。ひるがえって、「カザフ語」や「朝鮮語」などの項目について言えば、たとえ、カザフ共和国がキリル文字を捨てて旧来のアラビア文字を復活させたとしても、あるいは、韓国が北朝鮮のように漢字を完全に廃止したとしても、『言語学大辞典』におけるこれらの項目はびくともしないだろう。

う。

栗林氏が「内蒙古語」を「独立の言語」にしたてたもう一つの理由は、モンゴル人民共和国の「口語標準語」とは異なる「独自の口語標準語を育成している」ということである。これは極めて重要な認識の誤りを含んでいることを指摘しておかなければならない。

モンゴル人民共和国の共通語は、いわゆる「ハルハ・モンゴル語」である。またその口語標準語もハルハ方言であるように、種族的にみて、ハルハ・モンゴル人は全国人口の八割以上(但し、モンゴル族は全人口の九割以上)を占めている。したがって、モンゴル人民共和国は基本的にはハルハ・モンゴル人を基幹住民とする国家であると言うことができる。更に、言語的にみた場合、ハルハ方言を話す人口が上記の数字をはるかに上廻ることは容易に推測される。したがって、モンゴル人民共和国において、「口語標準語」という言い方はそれほど意味をなさない。辺境地域の特殊なオイラト方言やブリヤート方言を除いて、国民のほとんどが標準語を話しているからである。国民の四分之三がウランバートルという同じ町に住んでいることを考えあわせてもよいだろう。ハルハ方言は、モンゴル人民共和国において口語標準語であるばかりでなく、モンゴル文語にも近い口語であるため、他の方言の話し手にも分りやすいという特徴を持っている。

一方、中国領内のモンゴル語の「口語標準語」は、チャハル方言である。ところが、チャハル方言は言語的には内モンゴルのいかなる小方言(但し、「シリントル・ウランチャブ小方言」をハルハ方言、あるいはチャハル方言とみなさない場合は別であるが)よりもむしろ、ハルハ方言に近い。これは紛れもない事実である。それゆえ、ハルハ方言とチャハル方言は、内外の学者たちには極めて近い方言として認識されてきた。そればかりか、モンゴル人の学者たちの間では両者を同一方言に属する二つの下位方言として分類されている。

したがって、「口語標準語」の問題を取りあげて「ハルハ・モンゴル語」と「内蒙古語」の差異を強調しようとすることは、かえって両「言語」の親近性を強調することになるだろう。栗林氏の言う「独自の標準語」なるものは、決して二つの方言をそれぞれ「独立の言語」に導くような性質のものではないということは、『大辞典』の読者には特に知っておいてもらいたいのである。

3 「内蒙古語」の位置づけ

今日まで行われてきたモンゴル語の方言分類が、モンゴル語の言語内的事実にのみしたがって行われてきたことはすでに述べた通りである。日本でも早くから、服部四郎をはじめ、野村正良、小沢重男、橋本勝らの学者が海外の学

者たちによるモンゴル諸語の分類を紹介するとともに、独自の見解をも示している。ここにその具体的な内容を例示する必要はないが、しかし、これらの誰一人として「内蒙古語」という、「独立の言語」を挙げた者はいなかった。この伝統からすると『言語学大辞典』の「内蒙古語」は、日本のモンゴル語学界における画期的なできごとである。これを国際モンゴル学の規模で見た場合は、日本の学者が初めてこうした分類を行ったことになる。

では、「内蒙古語」は現地のモンゴル学者たちにはどのように位置づけられているだろうか。いくつかの例を紹介することによってこの問題を考えてみたい。

まず、内モンゴル大学のチンゲルタイ教授は、一九五五～五六年における全国規模のモンゴル諸語・方言調査を実施したあと、その資料を分析し、その第一段階の試みとして、中国領内のモンゴル諸語方言を次の五つの方言に分類した。⁽¹²⁾

- 1、バルガ・ブリヤート方言(新バルガ、陳バルガ、ブリヤート)
- 2、東部方言(ジョーオダ、ジリム、ジョスト)
- 3、中部方言(シリントル、チャハル、オールドス)
- 4、西部方言(エジネ・アラシャン、青海省と甘粛省のモンゴル語)
- 5、オイラト方言(新疆ウイグル自治区のモンゴル語)

しかし、チンゲルタイはこの分類を再検討した結果、⁽¹³⁾現在では上記の五つの方言を次の三つの方言にまとめている。

- 1、バルガ・ブリヤート方言
- 2、内モンゴル方言(上記の「東部方言」「中部方言」「西部方言」の甘粛省蘭北のモンゴル語を除くエジネ・アラシャン下位方言)
- 3、オイラト方言(上記「オイラト方言」と「西部方言」の青海及び甘粛省蘭北のモンゴル語)

チンゲルタイが分類を改めた主な理由は、バルガ・ブリヤート方言及び、オイラト方言に比べて、内モンゴル諸方言(前の分類の2、3、4)間の隔たりが少ないということから、全体のバランスを図ったものである。

中国社会科学院のドブも同じ三方言分類を行っているが、現在ではこの分類が、中国国内のモンゴル語方言の分類法として、最も有力であると言っている。呼称の違いこそあれ、栗林氏自身も、同様な分類法を用いて「内蒙古語」の方言を次のように紹介している。

内蒙古語の口語方言はきわめて多様である。それらは、
I) 西部方言、II) 東北部方言、III) 中部方言、に大別される。

このI~IIIの方言は、さらに、次のような下位方言を含む。

I) 西部方言

- a) 新疆方言
- b) 海西、蘭北方言

II) 東北部方言

- a) 新バルガ方言 } バルガ・ブリヤート方言
- b) 陳バルガ方言 }
- c) ブリヤート方言

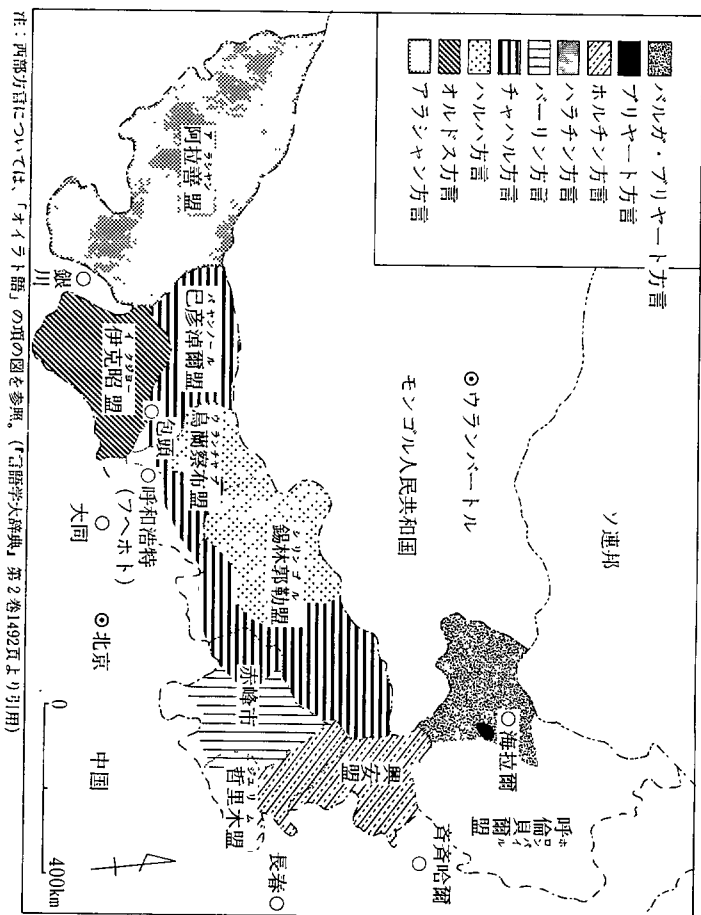
III) 中部方言

- a) ホルチン(科爾沁)方言
- b) ハラチン(喀喇沁)方言
- c) バーリン(巴林)方言
- d) チャハル(察哈爾)方言
- e) ハルハ(喀爾喀)方言
- f) オルドス(鄂爾多斯)方言
- g) アラシャン(阿拉善)方言

しかし、栗林氏の分類の観点はチンゲルタイなどの分類とは根本的に異なっている。チンゲルタイらが言う中国国内のモンゴル語の三方言は、栗林氏の分類では、いかなる言語学的な分類原理にもよらず、「内蒙古語」というわくの中に機械的に、無理に押しこまれた上、「内蒙古語」の中の三方言とされてしまった。

さらに、モンゴル語全体の中における「内蒙古語」の位置をいっそうはっきり見てとるために別の二人の所見を紹介しよう。

図 内蒙古語の方言分布



注: 西部方言については、「オイラト語」の項の図を参照。(『言語学大辞典』第2巻1492頁より引用)

内モンゴル社会科学院モンゴル語研究所の研究員B・トルゲンによれば次のようである。⁽¹⁴⁾

現代モンゴル語は、オイラト(西部)方言、ブリヤート(北部)方言及び、内モンゴル・ハルハ(中部)方言に分けられる。この三方言は、中国、ソ連とモンゴル人民共和国に分布している。

トルゲンはまた言語と文字体系の関係についても次のように指摘している。

文字体系は異なっても、文字によって表わされる言語の内的構造は同じである。したがって、言語の内的構造から見て、われわれはそれ(内モンゴル方言とハルハ方言——引用者)をただ、モンゴル語の中の同一の方言として包括し、内モンゴル・ハルハ方言、あるいは、モンゴル語の中部方言と言うべきである。

内モンゴル・ハルハ方言には七つの下位方言が含まれる。すなわち、チャハル、オールドス、ホルチン、バルガ、中部ハルハ、東部ハルハ、西部ハルハ下位方言である。

次は、内モンゴル社会科学院モンゴル語研究所のノルジンの見解である。⁽¹⁵⁾

現代モンゴル語は世界的規模においても国内においても同様に四大方言に分けることができる。すなわち、オイラト・カルムイク方言、ハルハ・チャハル方言、バルガ・ブリヤート方言及びホルチン方言である。

以上、中国の代表的な学者による分類を紹介し、そこから栗林氏の分類における「内蒙古語」がどのような根拠を持ちうるかを見た。

4 「内蒙古語」がもたらした問題

「内蒙古語」の創出により生じた矛盾及び問題についてここに若干述べておきたい。

まず、内モンゴルの諸方言とは地理的にも、言語的にも大きく隔たるオイラト方言(新疆ウイグル自治区、青海省、甘粛省のモンゴル語)を「内蒙古語」に入れてしまったために、言語の呼称に掲げられた地域名、すなわち、「内蒙古」と、その言語が実際に分布する地域との間に大きな隔たりが生じてしまった。

それは、前に引用した「内蒙古語の方言分布」(図)の中に、「内蒙古語」を形成する三方言のうち、二つの方言しか収まっていなかったことからも明らかである。(図)の下に添えられた「注」に注目してもらいたい。そこには「西部方言については、「オイラト語」の項の図を参照」と書いてある。なぜ、「内蒙古語」を見るために「オイラト語」の図を参照しなければならないのか。それは、栗林氏の記述では「内蒙古語」の一部分は、実は「オイラト語」の一部分でもあるという矛盾が生ずるからだ。

次にはさらに、オイラト方言やハルハ方言のような、中

国とモンゴル人民共和国の両国に跨る同一方言、または同一の低位方言とみなされる小方言が、異なる二つの「独立の言語」に属するという深刻な矛盾が生じている。

栗林氏の記述の中には、新疆などのオイラト方言を「内蒙古語」の一方言と言っておきながら、その中身を「オイラト語」の中で記述したり、また、「ハルハ・モンゴル語」のオイラト方言と、「内蒙古語」のオイラト方言はそれぞれ、異なる二つの「言語」の二つの方言だと言いながら、両者を同じ「オイラト語」の中の異なる方言として紹介するなどという、救いがたい混乱に陥っている。

もう一つ指摘しておかなければならない重要な問題は、内モンゴルのモンゴル人が自分の母語を呼ぶ際に用いていた、古くからの自称である「モンゴル語」をしりだけ、そのことによって「モンゴル語」という同一の言語から内モンゴルのモンゴル語の話し手を排除し、「内蒙古語」という別個の、「モンゴル語」とは対等の言語を立てたことである。

栗林氏は「日本語で「モンゴル語」がすでにモンゴル人民共和国の公用語（括弧内省略——引用者）を意味して用いられていることである……」という「事情」を述べながら、「ここでは、「内蒙古自治区」の名称をとって「内蒙古語」とし」たと書いている。しかし、私たち内モンゴルのモンゴル族のことをば、年配の人が「蒙古語」と言うこと

を除いて、「モンゴル語」と言わなかった日本人に私は一度も会ったことはない。

ところが、内蒙古自治区にはモンゴル民族以外にも多くの民族が住んでいるばかりでなく、モンゴル語よりもはるかに優勢な中国語をはじめ、他の少数民族の言語も話されている。したがって、「内蒙古語」とは、ひょっとして、内蒙古式の中国語だという誤解をすら生むおそれがある。

周知の通り、モンゴル族は内モンゴル自治区全人口の一割強しか占めない。しかもその中には民族語が話せない人が少なからずいる。それに、いわゆる「内蒙古語」が話されているのは「内蒙古自治区」だけではない。外にも新疆ウイグル自治区をはじめ、七つの自治区、省においてこのことばが話されている。しかし、こうした事情を無視したとしても、重大な誤りは言語の呼称に単純に行政上の地域名を流用したことから生じた。行政上の地域名は政治の都合により変化することがあり、また、方言の呼称も学者の見解や分類法のちがいによって異なることがあっても、「独立の言語」と見なされる言語の名称はそれを話す民族名、あるいは種族名と一致するのが一般的である。したがって、「内蒙古語」という「独立の言語とみなすことも可能」であるような「言語」を仕立てるためには、「内蒙古族」が存在するという前提がなければならない。しかしながら、「内蒙古族」なる「民族」や「種族」はどこにも存在しな

い。

内モンゴルのモンゴル人たちは昔から自分の言語を mongol xal—すなわち、日本の社会でもすでに公認された——「モンゴル語」と言ってきたが、この「モンゴル語」もまた、今までかつていかなる外国人学者によっても、また、いかなる政権からも否定されたことはなかった。

ところが、今や、学問が生んだこうした言語の呼称の問題は、学界のみならず、日本の実社会にも影響を与えはじめている。ここにそうした具体的な例を一つ挙げておきたい。「日本国際教育協会」は、外国人留学生に対し、毎年「日本語能力試験」を行っているが、その願書には受験生の「第一言語」(native language)を記入する欄があり、それぞれの母語に与えられた番号を、その中へ書き入れる仕組みになっている。そして、そのための諸言語の番号を付けたリストがある。そのリストには Kazakh (カザフ語)、Tibetan (チベット語)、Uighur (ウイグル語) のように、中国少数民族の言語も若干載っており、もちろん「モンゴル語」も入っている。ところが、この「モンゴル語」に与えられた英文は Khaikha Mongolian である。前に見てきた通り Khaikha Mongolian は「言語」ではなく、「方言」である。しかし、このリストで掲げようとしたのは「方言」ではなくて「言語」の名であるから、この英訳名は奇妙である。どうしてこのような事が生じたのだろうか、おそら

くたまたまこの英訳にあたった人が、「モンゴル語」とは正確には「ハルハ・モンゴル語」を指すものだという、学術めかした知識を持っていたからであろう。しかし、問題は内モンゴルからやって来た留学生たちの場合であるが、同じモンゴル語を母語にしながらも、それにあたる項目がないことである。そうなるとこの調査表には、やがては「モンゴル語」とは別の、「内蒙古語」という独立の項目を設けねばならなくなるであろう。その際にこの『言語大辞典』の「内蒙古語」は、こうしたいつわりの措置に根拠を与えらるものとして引用されるだろう。

栗林氏は、「言語名の「内蒙古語」は……確定的なものではない」とも言っている。しかし、栗林氏は、彼が『言語学大辞典』で多用する「内蒙古語」という奇妙な呼称を定着させるために、『大辞典』以前から前もって地ならしをしてきている。栗林氏はほぼ一九八五年の「蒙古語諸方言におけるウムラウト現象¹⁶⁾」という論文をさかいに、「内蒙古語」を使いはじめたのである。しかし、こうした奇態な概念を世になじませるには、それなりの工夫をしなければならなかった。「内蒙古語」には一々「(チャハル方言等)」というように、括号の中で解釈を付けねばならなかったのが一例であろう。それ以降の論文では時々「内モンゴル語」という表現も用いた。このように、『大辞典』の刊行から四年が経った現在では、「内蒙古語」(あるいは「内モンゴル

語」は着実に定着しつつあるようである。その証拠には、最近の若い専門家の一般向けの出版物にまで、このまったく学問的根拠のない、異様な概念がためらいなく披露されていることを指摘しておきたい。これにより、栗林氏の努力の成果はなんといっても、他の研究者に「内蒙古語」を認知させたことであろう。

5 おわりに

本稿において私は、現代モンゴル語の分類がいかにあるべきかを、モンゴル語圏の研究者たちの所説を参考にしながら述べてきた。そのような試みを行う必要があると感じたきっかけは、近年刊行された『言語学大辞典』がモンゴル諸語の記述にあたって示した誤りと矛盾に満ちた態度であり、そのことから生じた問題点については本稿において具体的に指摘しておいた。

『言語学大辞典』は、言語内的事実の記述に主眼を置いた、伝統的言語学の立場に立つ学術の書でありながら、奇妙なところで言語外的な影響を受け、「内蒙古語」などという、これまでのモンゴル学では考え及ぶことのなかった新しい項目をたてることによって「独立の言語」を創り出した。この分類が単にある地域の方言を他の方言と区別して取り扱うための、説明上の都合によるものではないことは、前に見てきた通り明らかである。

本稿ではまた、ささやかな一例しか示さなかったが、言語あるいは方言の分類が、思わぬしかたで実生活にも影響を及ぼすことがあるという社会言語学的な側面も指摘しておいた。それは、言語の記述が、決して言語そのもののレベルにとどまるものではなく、その言語の話し手である人間にもおおよそいうことを含んでいる。

- (1) Владимирцов, Б. Я. (1929), *Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия. Введение и фонетика* (Ленинградский Восточный Институт имени А. С. Енукидзе, Ленинград)
- (2) Санжеев, Г. Д. (1953), *Сравнительная грамматика монгольских языков*, т. I (Москва)
- (3) Poppe, N. (1955), *Introduction to Mongolian Comparative Studies* (Helsinki)
- (4) 桑席葉夫 (一九五九)『蒙古語比較語法』民族出版社、北京。
- (5) Санжеев, Г. Д. (1957) *Монгол хэл агуулгын учур* (Улсын Хэвлэлийн Газар, Улаанбаатар)
- (6) Лувсанпандан, Ш. (1959), *Монгол хэл агуулгын учур* (Studia Mongolica, Tomus I, Fasciculus 32, Улаанбаатар)

羅布桑旺丹 (一九五九)「關於現代蒙古諸語言、方言的分類問題」『北京大學學報(社會科學)』二期(北

- 京)
- (7) 小沢重男(一九六八)、『モンゴル語の話』大学書林、東京。
- (8) Мөөмөө, С. Мөнх-Амгалан Ю. (1984), *Орчин үеийн Монгол хэл, авгалуу* (Шинжлэх Ухааны Академийн Хэвлэл үйлдвэр, Улаанбаатар)
- (9) 『言語学大辞典』(一九八八)、第一巻、九七一—九七四、三省堂、東京。
- (10) 前掲『言語学大辞典』第一巻、一三〇〇—一三〇六。
- (11) 『言語学大辞典』(一九八九)、第二巻、一四二七—一四三四、三省堂、東京。
- (12) 内蒙古大学蒙古語文研究所編(一九八六)、『語文学術論文集』(蒙文)、第二巻、二九〇—二九六、内蒙古大学出版社、呼和浩特。

- (13) 清格爾泰(一九七九)、『中国蒙古語方言的画分』上、下、『民族語文』第一期、第二期。
- (14) 荀・図力更等著(一九八八)、『現代蒙古語研究概論』(蒙文)、三〇頁、内蒙古人民出版社、呼和浩特。
- (15) 照那斯図、李恒朴(一九八九)、『当代中国民族語言学家』四四七頁、青海人民出版社、西寧。
- (16) 栗林均(一九八五)、『蒙古語諸方言におけるウムラウト現象』、『音声の研究』第二一集、THE PHONETIC SOCIETY OF JAPAN.
- (17) 一ノ瀬恵(一九九一)、『モンゴルに暮らす』ii、六八、七八、一七五、一九四頁、岩波新書、東京。

(一橋大学大学院博士課程)